平成２５年3月３０日

高2回　　林　　孝治

体罰について（世の指導者として）

まえがき

先ず、指導的立場にある人として物的・人的に気配りすることは

（一）　安全の確保（怪我をさせないこと）

不安全状態・不安全行為を排除すること

本質的安全化の次元を高めること

（二）ルール（規則・規範）を厳守すること

守れないルール・守り難いルールを見直し早く改正実践できること（社会の変化により科学技術の発達が先行し、ルールが後追いになる）

（二）　マナー（行儀・作法・挨拶の心）の向上を諮ること

人としての行うべき言葉・態度、躾、（シツケ　身を美しく）

これらに心配りして人と人の信頼関係をより深めることではないでしょうか。

なぜ体罰に至るのでしょうか（スポーツに限らない）。

１、　指導者が剛毅で豪気でそして責任感旺盛で自我が強く「勝利」に熱中するあまり、ハードルを高く、向上心が強く、負けず嫌いのため、より上を目指すことに挑戦するため、実践できないと威厳がなく、自分自身を制御できなくなるのではないでしょうか。

２、　指導される側が指導者より「若年などのため」教えている指導意識が強くなり、過ぎたる行動に出るのではないでしょうか。

３、　指導する側に優位的な立場があり、指導を受ける側に進歩がみえないとイライラが蓄積し「気晴らし」「気分転換」的な短絡的な行動になるのではないでしょうか。

４、　指導される側の上達・進歩がみえても、褒めることをせず、より上を要求するため「ミスやエラーを追求」し信賞必罰の片務的な罰の行為が先行するのでしょうか。

人を動かす源は

１、やってみせ、やらせてみせて、ほめてやる

２、七つ褒めて、一つ叱る（アメとムチ、アメ７つ与えて、ムチ１つ）

３、褒めるときは大勢の前で、叱るときは一人部屋に呼んで）

４、褒めてあげると「やる気」が起きる

５、褒められて悪い気持ちになる人はいない

体罰は暴力で教育的指導ではありません。「勝」目的のための他の選択肢はないものでしょうか。例えば心・技・体に分類して見ましょう。

（1） 心、　好きにして上げる。好きだから苦しくても耐えられる。「やる気」がでる。
英語の先生が面白いから、英語が好きになる。化学の先生が手品のようなことを教えて下さるから化学が好きになる。指導者は好きになってもらうために自分の資質を積極的　に「個」を磨がかねばなりません。
「団体（チーム)」を磨く。「数」の上で１０人対１０人なら、どこまでも引き分け「勝負なし」です。一人が１の力のところを０，１多くの「やる気」を出せば１１人になり相手が１０人のままならば数の上で勝てます。「質」を向上すれば勝てます。その上チーム全体の志気を高め、協調の力を高めれば勝利に導ける筈です。

（2）技、　「学習は反復」です。繰り返し、繰り返し訓練・練習することです。サッカーのボールを最初から蹴れる人はおりません。
記録を統計的に分析して手順としての方法を決めて自主性を重んじて練習に工夫をもたせマンネリを回避することです。競技の差や個人差もありますが、基本が先です。肉体的なことも含めて例えばグランド５周のランニング、縄跳び１００回・腕立て伏せ５０回・鉄棒の懸垂３０回・柔軟体操５０分など指導者は個人指導のために指導者自身が「指導の仕方」を磨かなければなりません。

（3）体、　技術と共に基礎体力をつけることです。単に運動のための体力だけでなく、睡眠の深さ、栄養の知識、さらに怪我に対する応急処置なども指導者として平素から身に着けておくことです。
全ての罰は本人が罪を認めて納得の上で行われます。理不尽な道理に合わないことを無理に押し付け、言葉の暴力で心を傷つけ、人としての尊厳を冒さて堪えがたい心の苦痛になるものです。
刑法で殺人罪を犯したとしても、罰には死刑・無期懲役・１０年禁固無罪など罪の内容により罰が異なるように、体罰の前に「勝」ための目的に向かって手段として進歩・前進の方法を皆で話し合い対策を.策定し自主的な練習方法を実施するようにしたら如何でしょうか。

あとがき

スポーツマンが競技のルールを守ることは当然であり、人として生きていくために社会の秩序としてのルールを守ることは当然であると思います。そのルールの守れない指導者は資質に欠けていることになり、指導者を指導するための講習会・研修会を開催して指導者の再講習・再研修を実施して資格試験合格者でないと指導できない制度づくりが必要になります。罰則の適用も必要になります。どんな場合にも指導者は特に倫理人としての道を歩み生涯研鑽を積み成長せねばなりません。
世の中の事象の全部をルールにすることは不可能と思われます。だから、その前にマナーを守るための倫理人として真・善・美を基礎として行うべき善悪の判断・人間生活の規範の実践（躾　シツケ　身を美しく）の必要性があります。
(参考文献　ウエンデイ広島)